

【 復活讃詞 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死生、命、爾死降
と、き、かみのせいひかりにてぢご
時、神、性、光、地獄
くをころせり。しせしものをちかよ
殺、死、者、地下
りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復活、時、天軍皆
よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼、日、生、命、賜、主
ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾、神、光、榮、爾
き、す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮、父、子、聖、神、歸、今
いつもよよに、アミン。
何時、世、世
しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒、等、同、座、者、忠



司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより ^{さんえい} 讚榮せられ、^{ことごと} 悉くの ^{てんぐん} 天軍より ^{ふくはい} 伏拜せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と

なし、^{ひと なんぢ ぞう しょう} 人を爾の像と肖とに依りて造り、^{よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、

^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{そのすくい ため つうかい} 罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の ^{さいだん こうえい まえ た} 光榮の前に立ちて、^{なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

なしし ^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち} 主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも ^{せいさん うた う なんぢ じんじ} 聖三の歌を受け、爾の仁慈を

以て我等に ^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう} 臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{つみ ゆる わ たましい からだ} 我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常生者我等を憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖なる神、聖なる勇毅、聖
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常生者我等を憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖なる神、聖なる勇毅、
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖常生者我等を憐
れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光榮父子聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時も世世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我



が す く い と な れ り 。
 救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、



か れ は わ が す く い と な れ り 。
 彼 我 救

【 使徒經 (アポストロス) 194 端 コリンプ後書 11 章 31 節~12 章 9 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パヴェルがコリンプ人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい かみ われら しゅ ちち よよ しゅくさん もの わ いつわ} 兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世に祝讚せらるる者は、我が謊

^{し おい おう まちづかさわれ とら ほつ まち まも}らざるを知る。ダマスキに於て、アレタ王の邑宰我を執えんと欲して、ダマスキの邑を守

^{われかご もつ まど かき したが つ おろ かれて のが ほこ わ}れり、我筐を以て牖より牆に循い、縋り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が

^{ため えき ところ けだしわれしゅ けんげん もくし およ われ あ いちにん し}爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知

^{こ ひと じゅうよねんぜん にくたい あ し にくたい ほか あ し かみ}る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神

^{これ し だいさんちゅう てん あ われこ ひと おい その にくたい あ にくたい}之を知る、)第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其(肉體に在りてか、肉體

^{ほか あ し かみこれ し らくえん あ い がた ことば ひと かた あた}の外に在りてか、知らず、神之を知る、)樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わ

^{もの き し われか ごと ひと もつ ほこ おのれ もつ ほこ あるい われ よわ}ざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は私の弱

^{ほこ われも ほこ ほつ むち もの な けだしまこと い しか}きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞を言わん、然れど

^{われみづか いまし おそ ひと われ み ところ あるい われ き ところ す われ はか}も我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬ら

^{もくし しいだい よ わ たか ため ひとつ とげ わ にくたい あた}ん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、

すなわち つかい われ う ため わ たか ため われみたびしゅ これ われ
 即 サタナの使 なり、我 を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我よ
 はな もと しか しゅ われ い われ おんちよう なんぢ た けだしわれ
 り離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、我の恩寵は爾に足れり、蓋我
 ちから よわ うち おこな ゆえ われむしろあま わ よわ ほこ ちから
 の能は弱き中に行わる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の
 われ うち やど ため
 我の内に寓らん爲なり。

(比較用 口語訳) 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていないことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視したことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた——それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。この人が——それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである——パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタナの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

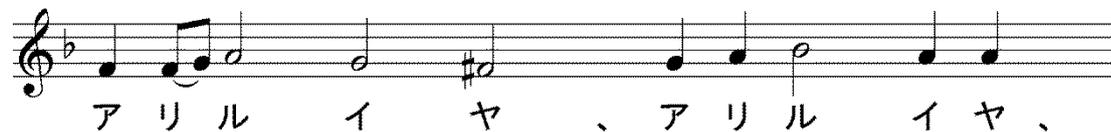
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

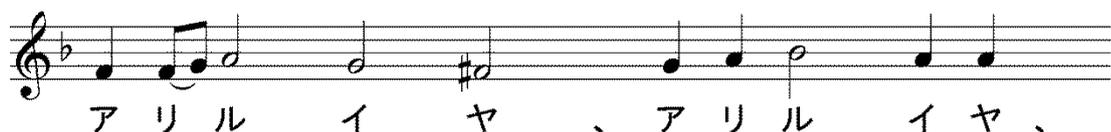
アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



誦經) 願ねがわくは主しゅは憂うれいの日に於ひて爾おいになんち聴きき、イアコフの神かみの名なは爾なんちをふせ扨まもぎ衛まもらん、



誦經) 主しゅよ、王おうを救すくえ、又また我われ等らが爾なんちに呼よばん時とき、我われ等らに聴きき給たまえ、



司祭) (黙誦: 人ひとを愛あいする主しゅ宰さいよ、我わが心こころに神かみをし知ちえ智慧いのきぎよ 淨ひかりき光かがやを輝わかし、我わが思し念ねん

め 目めを啓ひらきて、爾なんちが福ふく音いんの教おしえを悟さとらしめ給たまえ、我わが衷うちに爾なんちの福ふくたる 誠いましめを

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんち よろこ ところ
畏おそるる 畏おそれをも入いれて、我われら等らが 悉ことごとくにくたいの肉よく體ふの慾およを踏なんちみ、凡よろこそ爾ところの喜よぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思おもい且かつ行おこないて、屬ぞくしん神せいの生かつ活すを過いたぐるを致たまさせ給けだしえ、蓋かみハリスハリストス神かみよ、

なんち わ たましい からだ こうしょう われらなんち なんち むげん ちち しせいしぜん
爾なんちは我わが 靈たましいと體からだとの光こうしょう 照われらなり、我われら等ら 爾なんちと 爾なんちの無むげん原ちちの父しせいしぜんと至しせいしぜん聖しせいしぜん至しせいしぜん善しせいしぜんにし

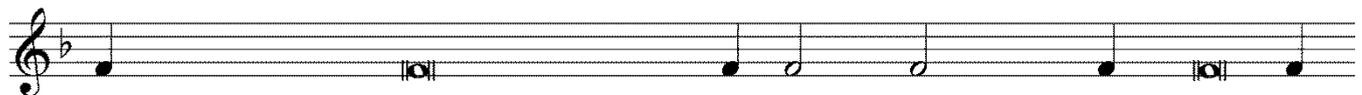
いのち ほどこ なんち しん こうえい けん いま いつ よよ
て生いのち命ほどこを施なんちす 爾しんの神こうえいとに光けん 榮いまを獻いつず、今よよも何いつ時よよも世よよに、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書35端 8章5~15節 】

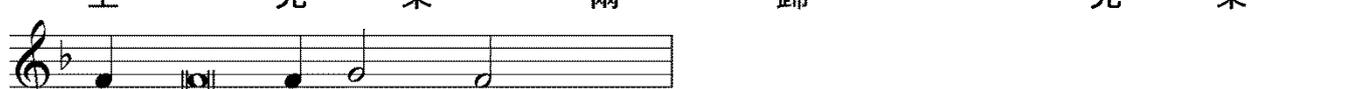
司祭) 睿えい智ち、肅つつしみて立たて聖せい福ふく音いん經けいを聴きくべし、衆しゅうじん人へいあんに平へい安あん、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聽くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、播く者は其種を播かん爲に出でたり、播く時路の旁に

遺ちし者あり、乃踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。石の上に遺ちし者あり、萌え

出でて稿れたり、潤澤なきが故なり。棘の中に遺ちし者あり、棘共に長びて、之を蔽

えり。沃壤に遺ちし者あり、萌え出でて、實を結ぶこと百倍せり。之を言いて呼べり、耳あ

りて聽くを得る者は聽くべし。其門徒彼に問いて曰えり、此の譬は何ぞ。彼曰えり、爾

等には神の國の奥義を知ること與えられたれども、他の者には譬を用いる、彼等視れども

見ず、聴けども悟らざる爲なり。此の譬の義は左の如し、種は神の言なり。路の旁

の者は、是れ聴けども、後惡魔來りて、其心より言を奪う、彼等が信じて救われざ

らん爲なり。石の上の者は、是れ聴く時喜びて言を受くれども、己に根なくして暫

く信じ、誘惑の時に背く。棘の中に遺ちし者は、是れ聴きて去り、而して度生の

おもんばかりと貨財と宴樂とに蔽われて、實を結ばず。沃壤に遺ちし者は、是れ言を聴きて、

清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。之を言いて呼べり、耳ありて聽く

を得る者は聽くべし。

(比較用 口語訳) 主は一つの譬で話をされた、「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。弟子た

ちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。この譬はこういう意味である。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快樂にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸 す。

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ